
P × H

バスカビル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P x H

【Nコード】

N 6 7 5 2 J

【作者名】

バスカビル

【あらすじ】

神様の手違いで死んでしまった少年がH×Hの世界でパンドラハーツのチェインを従えて暴れまわる、そんなお話。

プロローグ（前書き）

初めての小説でつまらないかもしれません。がよろしくおねがいします。

プロローグ

はじめまして、僕はどこにでもいる普通の男子高校生だ。

あつても漫画はけっこう好きだけどね。

そんな僕は今雲の上にいる……。

そう、それは20分ほど前のことだ。

僕はいつものように漫画を読んでいた。

「あー、H×H面白いなー、こんな世界に行ってみたいなー。まっそんなこと無理だけどねー」

そう言った時、目の前の空間がグニヤリと曲がった。

「#〒 <||@?¢/@#—%ゝg」

僕が声にならない声を上げると体中に痛みがはしった……。そして僕はいまここにいるのだ。

あたりを見まわすとおじいさんがのんびりお茶を飲んでいた。

「あの、すみませんここはいつたいたどこですか、私はだれ？…かはわかってるんですけど、あの、その、」

僕が尋ねるとおじいさんは、

「まあ、おちつきなさい順を追って説明しよう、まずここ天国とか極楽とかよばれている場所じゃ、そして私は神様じゃ。」

はっ。ちよつとまでよなにを言っているんだこのおじいさんは、可哀想にボケてしまっているのか……。

「失礼なガキじゃのー。私はれっきとした神じゃ、その証拠に、お前の秘密もすべてしっているぞ。例えば、おまえの一番恥ずかしい秘密は、一年生のとき、000が×××でーさらに\$\$\$が###」

「ぎゃーー！！なぜそれをー」僕は耳をふさいで絶叫した。

「ホッホッホ、しんじたかの？」

「はい……」間違いない、このひとは神様だ。あれを知っているなんて…。

「つてことは、僕は死んだつてことー！」

「ああ、すまんのー、ちょっとした手違いでのー」

「そんなー」まだしたいこともたくさんあったのにー。

「じゃが安心せい、いきかえらせてやるからのー」

「ほっ、ほんとですか！」

「ああ、ただしもといたせかいではむりじゃがのー」

「えっなんでですか？」

「それはもう、君の死体が発見されてしまったからじゃ、今から生き返ったらホラーじゃろ」

「そ、そんなー」

「だからせめてものおわびにH×Hの世界にてんせいさせてやる」

「ま、まじですか」

「ああ、まじじゃ。それと念能力はひみつじゃ。それではつぎの人生を楽しんでくれ」

こうして僕は生まれ変わったのだった。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか、一応このままかいていきたいと思いますがつまらなければどこがつまらないか教えて欲しいです。

目がさめると…（前書き）

今回はみじかいです、パンドラハーツをみたことがないひとにはわかりづらいかもかもしれませんが、見たことがない人にも楽しめるようにしたいです。

目がさめると...

「……んー、なんだか騒がしいな。男の声と女の声がする。

「ねえあなた、この子の名前なにがいいかしら」

「そうだなー、あ！アリスなんてどうだろう」

「まあ、ステキな名前。きまりね、この子の名前はアリスよ」

はい？えっちよつとまって、僕男なのにアリスって……。んっ、てことはこのひとたちが僕の新しい親ってことか。

僕は恐る恐る目をあけてみた。

目の前にいるのは二人の男女、男のほうは金色の髪にエメラルドグリーン
の瞳、女のほうはながい黒い髪にスミレ色の瞳。

こ、このひとたちはアリスとオズにソックリだ。ま、H×Hの世界だからパンドラハーツの設定は関係ないだろうけど。

両親の顔をポケーっと見ていると両親とは別の人の気配がした。

「オズ、アニー、子供が生まれたんだって？おめでとう」

「ミト、ありがとう」

んっミトだつて？ってことはあの布のなかにいるのがゴンか。なんか感動。

「ゴンとも仲良くしてくれとうれしいんだけどね」

「きつと仲良くなるとおもうわ」

父、母、ミトが話しているあいだ、僕はこんなにもはやくゴンとつながりをもてたことに狂喜していた。

目がさめると…（後書き）

次回は数年たったあとのはなしになります。

森で……（前書き）

アリス＝ア

ゴン＝ゴ

カイト＝カ

森で……

くうーくうー、やわらかくぼくをてらすおひさま、ここちよくふく風、ぼくはのんびりとひなたぼっこをしていた。

転生から9ねんほどたち、僕は前世のことをわすれてきていた。H×Hの原作の知識も主な流れいがい、細かいイベントは思い出せない。まあ、細かいところまで覚えていたらつまらないからべつに僕はきにしていない。さてまたねとするかな……

ゴ：「おおーい！！アーリースー！！！」

一瞬で目がさめた。

ゴ：「アーリースー」

ア：「ゴン、うるさい……。ぼくねてたのに……」

ゴ：「わりーわりー、なあ、アリス、森に行ってみようぜ」

ア：「森？」うーん、なんか森に行くとイベントがあったような……

ゴ：「なあ行こう、行こう、行こう、行こう、行こう、行こう、行こう」

ア：「わ、わかったわかった」

ゴンの勢いにおされるようにして僕は森へむかった。

森のなかはすがすがしい空気があふれていた、しばらく歩いているとゴンがなにやら見つけたようだった。

ゴ：「なあ、このつめのあとなんだろっ」

ア：「つめのあと？」その木にはたしかにつめのあとがあった、3ぼんと2ぼんのつめあとがこうさしている、そんなしるしがそこらちゅうにあった。

ア：「えーと、これはなんだっけ」そのとき漫画のワンシーンがあたまにうかんできた。

ア：「……これはキツネグマがのこすナワバリのシグナルだ……！」はやくここをはなれないと、でもはなれたらカイトとであえないかも……。いやそんなこと言っている場合じゃない。はやくにげ

…「ゴオオオオオー!!」「おそかったか……」。

ゴ：「わあ、なんだこいつは!」ゴンが叫んでいるがこちらはそんなばあいじゃない。

ア：（やつと、カイトにあえるんだ。実物もかつこいいかなー）

ゴ：「あ……、あ……」おちついている…というよりカイトにあえることをよるこんでいる僕にひきかえゴンは声もでないようだ。

「ゴアアア」キツネグマがゴンにおそいかかったそのとき、ギイン!というおととともにカイトがあらわれた。キツネグマのつめをけんでささえている。

カ：「子連れキツネグマか……。気の毒だが人間を傷つけちゃった巨獣は……処分する決まりだ」そういったかとおもつとキツネグマの首がちゅうをまとった。

森で……（後書き）

ちなみに主人公はカイト大好きです。

カイトイベント発生！？

「たてるか？」カイトがゴンにたずねる。

「あ、うん」ゴンがよろめきながらたちあがった。

（あーあ、殴られるぞー。すこしはなれてよ）僕はすこしはなれて心配をかけた。

ゴツ！ゴンがカイトに殴られてふっとんだ。

「馬鹿野郎！！こんな時期にヘビブナの群生地に入るヤツがあるか！！見る！！子連れのキツネグマが残すナワバリの信号だ！！そこから中にある！！これを見たらどんなノン気な動物も2秒後にはとなり山まで逃げるほどヤバイもんだ！！お前の親父はそんなことも教えてくれなかったのか！！くそ！！マダラリスの警戒音なんぞ無視すりゃよかったぜ！！久々に胸クソ悪い殺しをやっちまった」カイトがはきすてるように言った。

すると、 gon は暗い顔をして「親父はいない……オフクロも……オレがうまれてすぐ事故にあって死んだって……オレ……おばさんの世話になってるんだ」

（いやー、きみのおとうさんいきてるんだけどなー）

「……そいつは悪かった」

（えー、いまおとうさんがいるかいな関係ないんじゃない……）
いろいろつつこみどころのあるイベントだな。

「おい！そこのお前はだれだ！」カイトが威嚇してきた。まあ、けはいを微妙にけしていたからだろうが……。

「おい！きこえなかったのか」

「あつ、はい。えーと、僕はアリス＝ベザリウスそのこはゴン＝フリークスです！！」

「おまえなぜおれのなまえを……いや、それよりフリークスだと、まさか、こいつの親父の名前はジンって言うんじゃないか……」

ゴンがおどろいたように言った。「オジサン親父をしってるの!？」

（オ、オジサンって……）カイトはすこしショックをうけていた。

カイトイベント発生!?(後書き)

主人公は今の時点でもけっこうつよいです。

ハンターになろう!!!(前書き)

今回はかなり短いですがつぎのはなしは数年後なのでゆるしてくださいね。

ハンターになろう!!

カイトが話しはじめた。

「ジンさんはおれの師匠だ。ジンさんに認めてもらうための最終試験が「彼を探し当てる」ことなのさ、これがどんな狩りよりむずかしい。彼はオレの知る限り最高のハンターだ。ジンさんに会わなきゃオレはいまごろスラム街の路地裏でのたれ死んでいただろう。ジンさんは死んじやないよ。お前のおばさんはうそをついてでもお前に親父の跡をついでもらいたくないようだな。

だが、どうみてもお前達は優秀なハンターの器量だよ」

（やったー、このシーンをなまでみれるなんて、転生してよかった
ー。…ん？お前達？）

「えっ！ちよつとなにお前達って？」

「当然だろ。こんなとんであれだけ気配をけせるなんて普通のやつにはできねーよ」

（やっちゃったー）

「よし！アリス！いっしょにハンターになろうぜー！」

（はあー、うれしいような、かなしいような……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6752j/>

P×H

2010年10月8日21時28分発行